龜井勝一郎全集

第十九巻

講談社

亀井勝一郎全集　第十九巻

昭和四十八年二月二十日　第一刷発行
昭和四十九年二月二十日　第二刷発行

定価　二三〇〇円

著者　亀井勝一郎

発行者　野間省一

発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
郵便番号　一一二
電話　東京〇三(945)一一一一(大代表)
振替　東京三九三〇

印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　大製株式会社

落丁本・乱丁本は
お取り替えいたします。
©亀井斐子　昭和四十八年

Printed in Japan

0395-135190-2253（1）　(文1)

龜井勝一郎全集　第十九巻

編纂　河上徹太郎
中村光夫
丹羽文雄
山本健吉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第十九巻　目次

社会時評

文化映画について……一三
美しい服装の建設……一六
社会時評……二四
ラヂオと音楽……二四
文士の新生活……二六
文化時評……二七
国民学校の発足……二七
「科学的」といふ言葉……二九
文芸中央会の活動……三〇
不動の姿勢……三二
繊細な心……三三
新聞時評……三八
残酷な好奇心について……三八
スポーツについて……四一
無題……四五
冷い内乱……四九
「チャタレイ裁判」傍聴記……五一
第二十六条への疑問……五三
現代の悪夢……五三
漢文科の復活問題について……五五
独立日本の危険……五七
敗戦のつらさ……五九
総選挙の課題……六三
スローガンの喜劇……六三
再軍備と作家……六五
現代戦の特徴……六七
法律的なあまりに法律的な……六九
言論の自由だけは……七一

太子外遊について……七二
太子西へ行く……七四
衛星国としての独立……七六
滑稽極まる事件だ……七七
週間時評……七八
「話し合ひ」の意義……七八
政治批評あつて政治なし……八一
出版界の「近江絹糸」……八三
政治の主人公は誰？……八六
不思議な税金の魔術……八八
地方選挙への注文……九一
総長を殴つた学生……九三
日共の戦術転換……九六
現代野次馬論……九八
言論統制への危険……一〇一
保守政党、大決心の秋……一〇三
高すぎる勤労者の税金……一〇五
「年賀」の過剰？　意識……一〇七
韓国軍艦の無通告入港……一〇九
国会のお手盛退職金……一一
死を急ぐ子供たち……一一三
教育二法に学者怒る……一一五
酔ひどれ警官の乱闘劇……一一七
A級戦犯の発言……一一〇
増える青少年の性犯罪……一一三
宣伝広告のデカダンス……一一四
沖縄いつ還る？……一一六
坊さんの観光税スト！……一一八
台風来てからでは遅い……一一〇
波紋をよんだ「自由」の発言……一一三
「寄付」といふ行為……一一四
深まる二面外交の苦悩……一一六
生活を脅かすもの……一一八
歳末大売出しの旗のかげに……一二〇
納得ゆかぬ含みがある……一二一
皇室への事大主義……一二四
誘導兵器、日本に供与……一二六
古着は必ず破れるもの……一二八

停電は年中行事か……一五〇
誇り高きものへ……一五三
国鉄公社の在り方こそ問題……一五四
アメリカの良識は何処に……一五六
教育テレビの限界線……一五八
動き出した二つの委員会……一五九
生死の岐路に立つ人類……一六一
「愛される」にはまだ遠い……一六三
転任厭がる裁判官……一六五
有名無実のそしり……一六六
もう「形」を追ふのはやめよ……一六八
「平凡に見える苦闘」への関心……一七〇
明治が生んだ世界人……一七二
裁判官の勇気……一七三
平和への願ひ……一七八
憲法擁護の意味……一八〇
外の恐怖と内の恐怖……一八一
節度の喪失……一八六
社会時評……一八八
三鷹裁判と公正……一八九
二月三日の政治劇……一九二
生活の「バクチ性」……一九五
民主主義のむづかしさ……一九七
新生活運動に一言……二〇〇
社会時評……二〇二
婦人の政治力について……二〇二
国際間の危機と世界人……二〇五
社会と子供……二〇九
新しい愛国心について……二一二
家庭人として……二一六
憲法改正について……二一九
日本の立場から原水爆について……二二二
勤労の意義について……二二六
青春に望む……二二九
日本の明暗について……二三二
憲法改正に関する意見……二三五
大学文学部への疑問……二三九
スターリン批判……二四一

革命と自由……二四三
自由と自由の行方……二四五
知識人の自主性……二四九
下積みの人々にも……二五一
批評の礼節……二五三
「世界的」と「民族的」……二五五
奇怪な弁護士の言動……二五七
裁　判……二六〇
七月の表情……二六三
建国の日と国民感情……二六五
総選挙三ツの特徴……二六七
浮動票……二六八
「安保批判の会」の始まり……二七二
安保条約と私……二七五
戦争責任……二八二
週間時評……二八四
超党派的に考へよ……二八四
ほしい精神的抵抗心……二八七
頭は西洋、肉体は東洋……二九〇
ハンランする外国語……二九二
数字の魔術にご用心……二九五
守りたい基本的人権……二九七
なくせ地方の劣等感……三〇〇
考へたい「楽しみ方」……三〇二
大衆行動に反省を……三〇五
ほしい宗教への関心……三〇七
なぜ憂うつになるか……三一〇
守りたい自然の美……三一二
民族文化から創造へ……三一五
年月かけ大衆討議を……三一七
考へる時間を持て……三二〇
確立したい他人の私生活に
立ち入らない原則……三二二
すべて植民地が原因……三二五
忘れられた憲法記念日……三二七
言ひぶんは「明確」に……三三〇
まづ頭の交通整理を……三三二
自然美、いまやピンチ……三三五

卑屈になつてはダメ……三三七
残る一等国への幻想……三四〇
ともに理想を失ふ……三四三
危機感と消費ブーム……三四五
現状の打破精神としての国策……三四九
新政治体制と文学者……三五三
祖師の精神に還れ……三五五
迷信について……三五六
新ルネッサンスの礎……三五八
以和為貴……三六一
戦争と信仰……三六三
国民としての自覚……三六五
我が憂ひを述ぶ……三七〇
覚書……三七三
道徳の頽廃……三七六
金堂炎上……三七九
センチメンタル日本……三八三
好奇心の犠牲者……三八五
痴愚の言……三八七
日本的な、あまりに日本的な……三九一
ベストセラー論……三九四
独自の平和論……三九六
私の夢……三九八
流行歌論……四〇〇
混乱期の精神……四〇三
天皇・軍隊・共産党……四〇三
「西洋と日本」　笠信太郎……四一五
文明よ　さやうなら……四一七
右翼の心理……四一六
文化人といふ言葉……四一八
日和見主義の研究……四一九
文化人の責任……四二五
政治と宗教……四二四
日本の希望……四二五
六月の運勢……四二八
理想の政治家……四三〇
将来に一の光明をもたらす……四三二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

成人の日に寄せて……四五四
明治八十八年……四五六
常識と非常識……四五七
集団惨事のゆくへ……四五九
第二次虚脱状態……四六七
政治からの離脱……四六九
現代教育に私は何を希望するか……四七一
現代史のなかの一年……四七九
読書週間へ一言……四八八
プラサド大統領の印象……四九〇
日本の青春と未来……四九二
孤独をかみしめる機会……四九五
破壊される風景……四九八
現代の英雄と自殺者……五〇一
現代の世相……五〇三
昔の煩悩・今の煩悩……五一一
成人の日によせて……五一三
真の敵は姿をみせない……五一五
私の政治的報告……五二四
中国の旅から帰つて……五二四
中国人の身になつて……五二六
新春の感想……五二九
なにか異常な社会……五三一
中国についての自問自答……五三三
民族独立への道……五三八
歴史感覚と外交……五四一
日本に特別の配慮……五四三
文化と野蛮と……五四四
「道徳教育」の根本……五四七
日本語に弱くなる……五四八
忘れることの恐ろしさ……五五一
私と'62……五五三
国づくりと国こはし……五五三
中国から帰つて……五五六
英雄・凡人・狂人・妖怪……五五九
人類の花園……五六三

解題……五六

社会時評

文化映画について

文化映画といふ名称の適不適はともかくとして、最近この種の映画が数多く製作され、漸くその魅力を発揮し来つたことは注目すべき現象である。私はこれを広く解して、たとへば「ダーク・コンゴー」やオリムピックを映した「民族の祭典」のやうなものにまで成長して行くべきものと考へてゐる。それは独自に成長して行くだけでなく、他の一般映画とも様々のかたちで融合し、全体として映画が芸術品となる大切な土台となるだらう。対象を自然科学、或は社会生活の記録と限定しなくともよい。過去現在を通して、我が民族がもつ最高の文化的精華を映し、これを普及して、我々の美と科学の教養を押しすゝめる一要素となつて貰ひたいのである。たとへばわが国の建築のいかなるものが最も見事であるか、或はどういふ風俗が真に優雅といへるか、また古代の仏像における信仰と美の融和の姿、さういふ点を、背景の深さとともに与へてほしいのである。このことは、所謂劇映画にみらるる現代の文化的混乱——むしろ非文化的猥雑さに対して、一種の文明批評の役割さへ果すであらう。

劇映画の批評は随分盛んで、文学的流行語を用ひた尤もらしい言説が多いが、筋や演技に対する批評に比較して、背景とか衣裳とか趣味に関する批評は案外貧しい。といふよりは手も足も出ないと言つた方がよからう。それは枝葉末節に属することと云ふかもしれぬが、枝葉末節のところに、我々の教養が露骨にあらはれ易い。元来教養は、それが自然になればなるほど、仄かな陰影となつてあらはれるものであるから、映画の製作者は、文化の多方面にわたつてよき趣味を体得しておく必要がある。そして、それは同時に現代文化の猥雑さに対する戦ひでもなければならぬのである。むろん、映画以外のすべてについても同様のことはいへるであらう。今日の文化全体が、西洋輸入の不消化物を伴つてゐることは悲しむべき現象だが、これを批判し克服するために、文化映画は一つの有力な手段だと私は考へてゐるのである。科学知識の普及、社会生活の実情紹介といふ意識だけでは不充分である。文化映画の当事者は、この際、確乎たる理想を樹立し、最高の目標をきめておく必要がある、即ち、当事者はまづ文明批評家でなければならない。

すべての芸術には古典がある。長い伝統がある。さういふものへの愛情がなければ芸文の花は決して開かない。どのや

うな芸術にも例外なくかういふ生命の流れはある。ところが映画にはそれ自身として古典がなく、伝統も非常に浅い。全く新しい分野に登場してきた。映画に従事する人々は、外国映画から学ぶ点も多いであらうが、他の古典をもつ芸術に依存することが一層多いと思ふ。すべての点で創作である映画の出現はむろん第一の理想だが、さうなるために長い間映画は他芸術の影響を最大限にうけいれねばなるまい。それは重要なことである。その重要さをより徹底的に認めて貰ひたく私は思つてゐる。文学ばかりでなく、建築や彫刻や絵画の古典につとめて接触し、意識的に模倣することさへ必要であらう。さういふ準備のために、つまり劇映画の製作者自身の教育のためにも、文化映画は一つの有力な手段だと私は考へてゐる。

たとへばオリムピック映画の「民族の祭典」の冒頭に、古代希臘の廃墟があらはれる。ついで彫刻があらはれる。あの部分の美しさは、あれだけとして最高の文化映画といへよう。現代ヨーロッパ人が断えずそこを回顧する、人間の肉体と精神の最も見事な開花時代、あの典型から無限の思想と高貴な趣味が流れてくる。他の芸術領域でさうである以上、映画においてもかゝる伝統を生かすことは当然考へられねばならぬ。その生かし方は勿論むづかしい。効果はすぐあらはれるといふ性質のものでもない。しかし製作者は、かうして自己の芸術的感覚に洗練を加へられるであらう。リーフェンシュタール女史は、古代希臘の理念を、せめてその片影でも現代スポーツにみようと努めてゐる。尤もいまのオリムピックは、スポーツ中心となつてゐて、古代希臘の理念とはおよそかけ離れ歪曲されたものであるから、「民族の祭典」でもそのイメージは連続しない。古代希臘の彫塑をみた眼には、ベルリーンに集つた各国の選手達は、醜男醜女の見本のやうな感がある。むろん、これはリーフェンシュタールの罪ではない。古代と現代の間に、人類文化の退歩はあつても進歩などは存在しないといふ事実を語つてゐるにすぎぬ。

私はこの映画をみてゐて、二重の敵愾心を感じた。一つはスポーツに就て、いま一つは古代希臘の映写についてである。スポーツについていへば、日本の選手が勝つて国旗があがると嬉しいし、負けるとくやしい。アメリカの旗だけがやたらに掲揚されるのが癪に障るといふ単純な敵愾心である。民族の内部にひそむ自尊心が単純にゆすぶられるといふ事実である。私はこの単純な敵愾心を勿論尊重してゐる。

古代希臘の建物や彫塑をみて感じた敵愾心はやゝ複雑であつた。私は古代希臘を尊敬し憧憬してゐるものである。西洋文化の淵源に在るもの、云はばその泉の一つを、西洋文化の末流に溺れかねない現代日本人にみせることは重大な任務であると常に考へてゐるものである。あらゆる民族の最高精華

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com